

# 発生動詞の位相分析

－起きる・起こる・生じる・生ずる－

井上 次夫<sup>1)</sup>

(2018年9月28日受付、2018年12月17日受理)

Analysis of Linguistic Registers of Occurrence Verbs

－ “Okiru”, “Okoru”, “Shojiru”, “Shozuru”－

Tsugio INOUE<sup>1)</sup>

(Received: September 28, 2018, Accepted: December 17, 2018)

## 要 旨

発生動詞「起きる」「起こる」「生じる」「生ずる」の位相は、社会的位相及び様式的位相から重層的に捉えることができる。しかし、「起きる」「起こる」の位相は、「生じる」「生ずる」に比べ、それほど明らかではない。例えば、先行研究の中には、新聞記事の発生動詞の分布における「起こる」の相対頻度の低さをジャンルの特徴（相違）に起因するものではなく、時間変化の反映ではないかとするものがある。

そこで、本稿では、様式的位相の観点から、発生動詞の文体についてBCCWJ（「現代日本語書き言葉均衡コーパス」）の白書、国会議事録、書籍、Yahoo!知恵袋の各コーパス、毎日新聞（日経テレコン21）などを用いて発生動詞の位相について分析した。そして、時間変化及び語種の観点にコーパス文体値とアンケート文体値を加えて検討し、発生動詞の文体の程度を明らかにし、文体式として提案した。

キーワード：発生動詞、位相、コーパス、アンケート、文体値

## Abstract

The aim of this paper is to reveal linguistic registers of the following occurrence verbs in Japanese:

*okiru* (to arise) *okoru* (to occur) *shojiru* (to come into being/to come about) *shozuru* (to result from)

Linguistic registers of “okiru” and “okoru” are not as obvious as those of “shojiru” and “shozuru.” One previous study has paid particular attention to the lower relative frequency of “okoru” in the newspaper corpus in a distribution survey of occurrence verbs. The study suggested that it may reflect a time change, rather than a difference between genres. To explore this possibility, the paper analyzed the distribution and style of writing of occurrence verbs using the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ) sub-corpus (white papers, diet records, books, and Yahoo! Answers) as well as the newspaper corpus from the viewpoint of written language likelihood. The discussion was then expanded by taking into account time change, word types, corpus writing style values, and questionnaire writing style values, thereby revealing the differences in the writing styles of occurrence verbs in writing style formulas.

Key words: occurrence verbs, linguistic registers, corpus, questionnaire, writing style formula

---

1) 高知県立大学文化学部 教授  
Professor, Faculty of Cultural Studies, University of Kochi

## 1. はじめに

本稿は、動詞の中で、これまでなかった事態、ないしは一時潜んで現れなかった事態が突如生じる発生現象<sup>1)</sup>を表す動詞を発生動詞と呼び、そのうち「起きる」「起こる」「生じる」「生ずる」の位相差を明らかにすることを目的とする。かつて前川(2011)は、発生動詞の量的分析において様式的位相の観点に立つ解釈に疑義を呈し、社会的位相の観点から検討した見解を述べている。本稿では、その見解に対し、改めて様式的位相の観点から発生動詞の調査・分析を行い、発生動詞の位相はどのように考えるべきか、その文体はどのように位置づけられるかを示す。

以下、第2章では発生動詞が有する社会的位相の側面と問題点を指摘し、第3章では発生動詞の位相について主に様式的位相の側面から大規模コーパスを用いた調査により検討する。そして、第4章では様式的位相の観点に基づく発生動詞の文体について分析を行う。

## 2. 発生動詞の位相

### 2. 1 社会的位相

田中(1999)の位相研究では、日本語の位相差をもたらす要因として、社会的位相、様式的位相、心理的位相の3つを挙げ、それぞれで考えられる要因を次のように例示している。

- ・社会的位相：性別によるもの、世代によるもの、身分・階層によるもの、職業・専門分野によるもの、社会集団によるもの
- ・様式的位相：書きことば・話しことばの差異によるもの、文章のジャンル・文体の差異によるもの、場面・相手の差異によるもの、伝達方式の差異によるもの
- ・心理的位相：忌避の心理によるもの、美化の心理によるもの、仲間意識によるもの、戦場心理によるもの、対人意識・待遇意識によるもの、売手・買手の心理によるもの

本稿の発生動詞のうち「生じる」「生ずる」についてみると、両語は漢語サ変動詞であり、古語「生ず」から「生ずる」、そして「生じる」という歴史的変遷を経ている。このため、両語の位相差は田中(1999)の社会的位相では「世代によるもの」に該当する。一方、「起きる」「起こる」についてはどうか。「起きる」は古語「起く」からの歴史的変遷があるのに対し、「起こる」は古語でも「起こる」であり歴史的変遷はみられない。ただし、古語「起く」の意味は「起き上がる、目を覚ます」であり、「発生する」の意味は古語「起こる」が担っていた。このため、発生動詞「起きる」「起こる」の社会的位相における世代差(時代差)については、「起こる」のほうが「起きる」よりも古いということになる。

さて、『集英社国語辞典』第3版で発生動詞4語を引いてみよう。この辞典は、《古語》《俗語》《幼児語》《女性語・女房詞》を始め、現代語のうち、主に文章や改まったスピーチに用いられる《文章語》、くだけた日常会話に用いられる《口頭語》など見出し語の位相を表示している。まず「生じる」を引くと、空見出しで「生ずる」を参照するようにとある。そこで、「生ずる」の項を引くと次の通りである。

- 【生ずる】[自他サ変]《文章》①草木などが生える。芽などを生やす。「かびがー」「葉をー」  
 ②事件・物事などが起こる。また、起こす。「問題がー」「ひずみをー」。「生じる」ともいう。☒生ず<サ変>

ここから「生ずる」は、文語「生ず」に遡ることができること、現在「生じる」という語形も存在すること、そして、「生ずる」が主に文章や改まったスピーチに用いられる「文章語」であることがわかる。しかし、「起きる」「起こる」の項にはそのような位相に関する情報は何も記されていない。

なお、位相は、田中（1999:9）が「言語の位相的特徴は、実際の言語表現においては、種々の面からのものが、複雑にからみ合って重層的に働く傾向が強い。これが、位相というものの特性であり、現実の言語表現が、単一の位相的観点だけで割り切れるということは、あまり期待できない」と指摘するように、その重層構造を認めたくえて、位相差をもたらし要因の強弱を分析していく必要がある。発生动詞の場合でいえば、「生じる」「生ずる」は社会的位相の「世代によるもの」とだけ捉えるのではなく、様式的位相の「書きことば・話しことばの差異によるもの」「文章のジャンル・文体の差異によるもの」との関係においても捉え、分析する必要があるということである。「起きる」「起こる」の場合も同様である。

## 2. 2 前川（2011）の分析

前川（2011）は、新聞記事（毎日新聞2003年分）と国会会議録、BCCWJ（「現代日本語書き言葉均衡コーパス」）書籍を対象に、主格補語「問題が」、「事件が」と、その直後に位置する述語動詞「起きる」、「起こる」、「生じる」（ないし「生ずる」）の共起関係を調査し、「問題が」の結果を表1のように示す。

表1 「問題が」と「起きる」「起こる」「生じる」の共起関係

コーパス	起きる (%)	起こる (%)	生じる (%)
新聞記事	84 (52.8)	12 (7.5)	63 (39.6)
国会会議録	85 (20.7)	143 (34.9)	182 (44.4)
BCCWJ書籍	113 (25.7)	114 (25.9)	213 (48.4)

前川（2011:4）によれば、国会会議録とBCCWJ書籍の分布パターンが類似しており、新聞記事は独自の分布を示しているように見える。しかし、この解釈には問題があり、国会会議録は60年以上、BCCWJの書籍サンプルも30年以上の時間幅にわたるサンプルであるのに対して、新聞記事は2003年という近年の日本語からのサンプルであるため、表1における相対頻度（百分率）の差はジャンルの特徴（相違）に起因するものではなく、日本語の時間変化の反映である可能性があるという。

その可能性を検討するために、前川（2011）は、BCCWJサンプルの書誌情報の一部として提供されている著者の生年代情報を利用した調査を実施し、次ページの図1を示す。ただし、これは前川（2011:4）が示した図について、論者が今回、新たに行った追調査のデータに基づき作成したものである。図1の縦軸は各動詞の相対頻度（百分率）である。横軸はサンプルの著者の生年を30年単位の4グループに分類して古い順に配置している。なお、「1870～1890」は1870年から1899年までを表す。

図1は、前川（2011:4）が指摘するように、話者の生年代とともに「起こる」の生起率が単調に低下し、その一方「生じる」の生起率が単調に増大したことを示している。その結果、最も若年層の著者では「生じる」の頻度が顕著に高く、「起こる」の頻度が顕著に低いパターンが形成されていることがわかる。前川（2011）は、このことを根拠に、表1の新聞記事における「起こる」の相対頻度の低さ（7.5%）は「新聞記事というジャンルの特徴（相違）」ではなく、現代日本語の一般的傾向を反映するものではないかという見解を述べている。しかし、この見解には次のような問題点と改善点を指摘することができる。

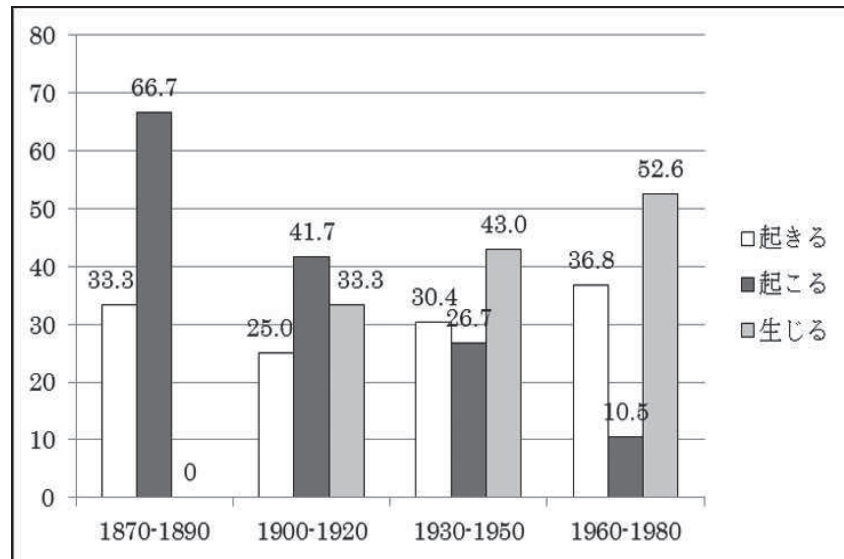


図1 BCCWJ書籍サンプルの著者生年代と「起きる」「起こる」「生じる」の相対頻度（主格補語は「問題が」）：論者作成版

- (1) 新聞記事（毎日新聞2003年分）における「起こる」の相対頻度の低さの原因について、書籍調査（1870年～1989年）の結果を根拠に、日本語の時間変化に起因すると推測している。しかし、この推測を導くためには、書籍と同期間にわたる新聞記事（毎日新聞）の調査を行うことが必要である。
  - (2) 新聞記事（毎日新聞2003年分）における「起こる」の相対頻度の低さについて、主格補語「問題が」と発生動詞の共起関係の調査を根拠に、現代日本語の一般傾向ではないかと推測している。しかし、この推測を導くためには、主格補語「問題が」以外に広く主格補語「(事故・災害・被害・需要…)」が」と発生動詞の共起関係の調査を行うことが必要である。
  - (3) 新聞記事（毎日新聞2003年分）における発生動詞の分布が日本語の時間変化に起因すると予測する根拠は（1）で書籍調査の結果により示してはいる。しかし、それがジャンルの特徴（相違）に起因するものでないとする論拠を示していない。このため、少なくとも主格補語「問題が」と発生動詞の共起関係について、新聞、書籍以外のジャンルのコーパスにおいても調査を行う必要がある。
- 次章では、上記の点について発生動詞の様式的位相の観点から調査・分析し、検討を行う。

### 3. 発生動詞の位相調査

#### 3. 1 新聞記事調査

本節では、まず問題点（1）、表1の新聞記事における「起こる」の相対頻度の低さが、はたして日本語の時間変化の反映に起因するものといえるかを検討する。このため、書籍と同期間（1870年～1989年）にわたる新聞記事（毎日新聞）の調査を行う必要がある。しかし、現在、新聞記事（毎日新聞）コーパスで遡ることができるのは1987年以降であるため、ここでは暫定的に毎日新聞（「日経テレコン21」1987年～2010年）を対象に「問題が」と「起きる・起こる・生じる（「生ずる」を含む）」3語との共起関係について調査することとした。その結果、発生動詞の相対頻度は平均「起きる53.8%」「起こる14.9%」「生じる31.2%」であり、期間内でほぼ一定していた（図2）。よって、書籍調査（1870年～1989年）でみられた発生動詞の「起こる」の相対頻度の減少、「生じる」の増加という時間変化を反映する現象は、この調査

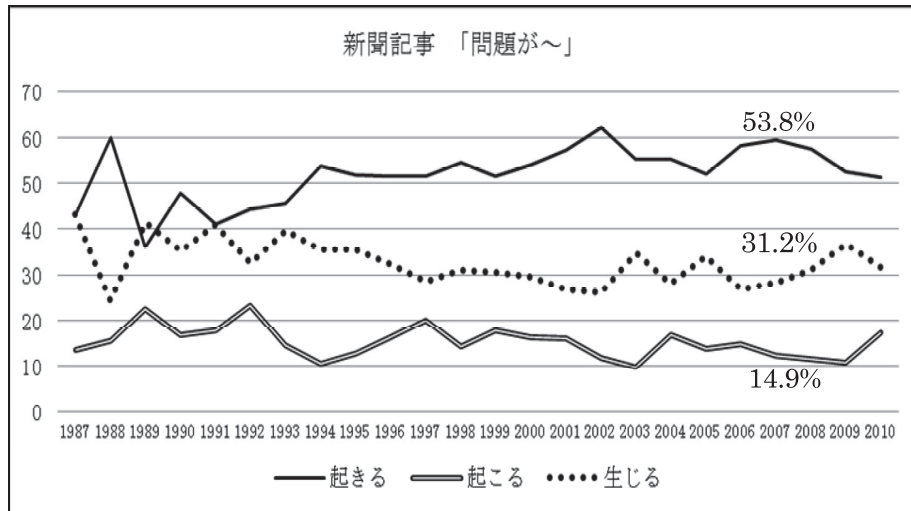


図2 主格補語「問題が」と発生動詞の共起（毎日新聞）

(1987年～2010年)からは認められない。ただし、前述の通り、書籍調査と同期間についての新聞記事の調査ではないため、表1の新聞記事における「起こる」の相対頻度の低さに時間変化が反映している可能性についての判断は保留せざるを得ない。

次に、問題点(2)、表1の新聞記事における「起こる」の相対頻度の低さは、はたして現代日本語の一般傾向であるといえるのかを検討する。そのために、主格補語を「問題が」に特定せず、広く主格補語「(事故・災害・被害・需要…)が」と「起きる・起こる・生じる(「生ずる」を含む)」が共起する相対頻度について調査した。その結果、発生動詞の相対頻度は平均「起きる56.3%」「起こる22.5%」「生じる21.2%」であり、期間内(1987年～2010年)ではほぼ一定していた。すると、この調査からは、「起こる」(及び「生じる」)の「起きる」に対する相対頻度の低さが現代日本語の一般傾向である可能性があるといえるかもしれない<sup>2)</sup>。しかし、さらに新聞記事以外のジャンルのコーパスにおける調査が必要である。

他方、新聞記事のデータについては次のような問題もある。

表1の国会会議録、BCCWJ書籍の相対頻度は、30年以上、60年以上のサンプルに基づく平均値であるため、2003年分を対象とする新聞記事の平均値と単純に比較することには問題がある。なお、BCCWJ書籍の場合、図1の「1960～1980」の30年において「起きる36.8%」「起こる10.5%」「生じる52.6%」であった。これを表1の新聞記事(2003年)の「起きる52.8%」「起こる7.5%」「生じる39.6%」と比較すると、「起こる」の相対頻度の低さ(10.5%、7.5%)は共通する。だが、「起きる」と「生ずる」では逆転している。この分布は、時間変化の違い(社会的位相)によるというよりも、書籍と新聞記事というジャンルの相違(様式的位相)に起因するというほうが適切だろう。

また、新聞記事というジャンルについて考えてみると、これは書籍のような個人の産物ではなく、それぞれの記者個人による執筆ではあるが、新聞社という組織の産物として提供される。このことから、上述の分布の相違は時間変化の違い(社会的位相)によるというよりも、個人の書籍と組織の新聞記事というジャンルの相違(様式的位相)に起因するものであると考えられるのである。

### 3.2 BCCWJ調査

本節では、問題点(3)、表1の新聞記事における発生動詞3語の分布が日本語の時間変化の反映によるものであり、ジャンルの特徴(相違)に起因するものではないといえるか。換言すれば、発生動詞3語の



分布は、ジャンルの特徴（相違）に起因するものではないかという観点から検討する。そのために、新たにBCCWJ2009の国会議事録（1976年～2005年）、白書（1976年～2005年）、Yahoo! 知恵袋（2005年）のサブコーパス3種を対象に「問題が」と発生動詞の共起関係の調査を行った。結果を表2に示す。

すると、第1に、「国会議事録（井上）」における相対頻度は平均「起きる31.6（22.9）%」「起こる44.3（44.5）%」「生じる24.1（32.6）%」（括弧内は主格補語を特定しない場合、以下同じ）であった。なお、この期間内に「生じる」の増加、「起こる」の減少傾向がみられた。第2に、「白書（井上）」においては平均「起きる0（3.9）%」「起こる1.3（6.5）%」「生じる98.7（89.6）%」であった。この期間内に「起こる」の微増、「生じる」の微減はあったが、発生動詞3語の相対頻度はほぼ一定していた。第3に、「Yahoo! 知恵袋（井上）」では、平均「起きる39.1（38.5）%」「起こる39.1（40.2）%」「生じる21.7（21.3）%」であった。ただし、表内の「国会会議録（前川）」は、国立国会図書館が公開している「国会会議録」の全体を検索した結果（前川2007:18）であるのに対し、「国会議事録（井上）」はBCCWJ2009の国会議事録（1976年～2005年）を調査対象としている。また、「Yahoo! 知恵袋（井上）」はBCCWJ2009に収録されている2005年の1年間分のみのYahoo! 知恵袋を対象としている。

また、表2の新聞記事（前川）、国会議事録（井上）、白書（井上）、Yahoo! 知恵袋（井上）、BCCWJ（前川）の5つのジャンルにおける発生動詞の分布状況を図3に示しておく。

表2 「問題が」と「起きる」「起こる」「生じる」の共起関係

コーパス（調査者）	起きる（%）	起こる（%）	生じる（%）
新聞記事（前川）	84（52.8）	12（7.5）	63（39.6）
国会会議録（前川）	85（20.7）	143（34.9）	182（44.4）
国会議事録（井上）	55（31.6）	77（44.3）	42（24.1）
白書（井上）	0（0）	1（1.3）	76（98.7）
Yahoo! 知恵袋（井上）	9（39.1）	9（39.1）	5（21.7）
BCCWJ書籍（前川）	113（25.7）	114（25.9）	213（48.4）

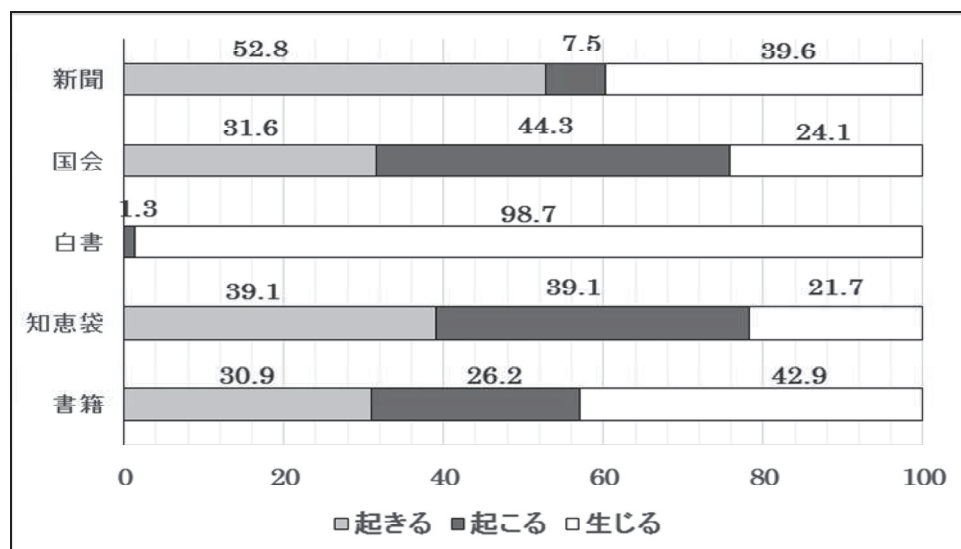


図3 「問題が」と発生動詞の共起（コーパス調査：単位%）

以上から、国会議事録においては日本語の時間変化の反映を認められる一方、現代日本語としては国会議事録では「起こる」、白書では「生じる」、そしてYahoo!知恵袋では「起きる・起こる」の相対頻度の高さが特徴的であるといえる。したがって、表1、表2の新聞記事の発生動詞3語における相対頻度が「起きる」が高く「起こる」が低いという分布は、日本語の時間変化の反映によるものというよりも、むしろ国会議事録、白書、Yahoo!知恵袋といったジャンルの特徴（相違）に起因するものと考えられる。

ここまで、前川（2011）の見解に対し、発生動詞の分布が社会的位相というよりも、様式的位相によるものと考えられることをみてきた。次章では、話しことばと書きことばの相違という様式的位相の観点から、発生動詞の文体の位置づけを行う。

## 4. 発生動詞の文体

### 4. 1 単語の文体

宮島（1972:709）は、単語の文体的性質を「単語の文体」と呼び、その3分類を行っている。

ここでは、動詞の文体を、つまり単語の文体を問題にする。単語の文体というのは、文章全体としての文体をなりたさせるような、個々の単語のもっている特徴のことである。たとえば、ある文章がくだけた調子でかかっているというとき、その特徴を決定する1つの要素としては、そこにつかわれている単語の性質、すなわち、あまりかたくるしいものではなく、日常的な会話でもつばらもちいられるものだ、ということが、はたらいっているであろう。単語の文体をここでは大きく、日常語・文章語・俗語の3つにわけるとする。

その後、宮島（1977:873）は「単語の文体」3分類は概念的であるとし、日常語を3分類した5分類を示した<sup>3)</sup>。これを受けて、井上（2010a）は、宮島（1977）の文体名と自身が命名した文体名を示した後、それらとBCCWJのコーパスとの関係について次のように述べたうえで、表3を示している<sup>4)</sup>。

「国会議事録」は一次的には話しことばであるが、基本的にあたたまった日常語でもあるため、いま、その取り扱いについては保留する。また、「書籍」については地の文と会話文が混在しているため、それを区別しながら調査することが実際には容易でない。さらに、(中略)地の文と会話文を区別しながらの調査はいっそう難しいため、いま、その取扱いは保留する。以上のことから、本稿では残された「知恵袋」と「白書」を主に取り上げ、前者を卑俗・口頭体、後者を書記・文語体と対応させ、汎用体を含めた3分類における語の文体の位置づけを図る方法について次章で検討する。(後略)

表3 コーパスと単語の文体

BCCWJコーパス	総数	位相	宮島（1977）	井上（2010a）
Yahoo!知恵袋	約500万語	話し言葉	俗語・くだけた日常語	卑俗・口頭体
国会議事録	約500万語	話し言葉・書き言葉	あたたまった日常語	書記体
書籍	約700万語	話し言葉・書き言葉	無色透明な日常語	汎用体
白書	約500万語	書き言葉	文章語	書記・文語体

その後、井上（2011a）は、井上（2009a）で示した「語の文体5分類」の表に、新たに文体レベルの項を加えて「単語の文体」の5分類として表4のように整理した。

表4 「単語の文体」の5分類

印象	くだけた ←	うちとけた ←	普通 →	あらたまった →	かたい
文体（井上）	卑俗体	口頭体	汎用体	書記体	文語体
宮島（1977）	俗語	くだけた日常語	無色透明な日常語	あらたまった日常語	文章語
田中（1999）	会話的	話しことば的	一般	書きことば的	文語的
ことば	話し言葉	話し言葉	話し言葉・書き言葉	書き言葉	書き言葉
主な場面	私的会話	日常会話	公私等の別なし	公的発言・論説文	論文・詩歌
語例	あっし	あたし	わたし	わたくし	小生
	けど	だけど	けれども	しかし	しかしながら
	φ	なかでも	とくに	とりわけ	なかんずく
	だって	φ	φ	というのは	なんとなれば
文体レベル	1	2	3	4	5

このように、単語の文体は、宮島（1972）の3分類から始まり、現在は5分類が行われている。他方、井上（2009b）のように教育上・実用上の視点から2分類を提案するものもある。

#### 4. 2 コーパス文体値

井上（2010a）は、語の文体の位置づけを図る検討の中で、BCCWJ2009の白書における語の出現数（x）とYahoo!知恵袋（以下、知恵袋）における語の出現数（y）を用いて単語の文体（あらたまり度）を極座標で表すことを提案し、次のような語（W）の文体値を示した。

$$\text{「コーパス文体値」} = W(a, b), \quad a = \tan \theta \text{ (傾き)}, \quad b = r/10 \quad (r^2 = x^2 + y^2)$$

(a: 書きことばらしさの程度、b: 使用度)

例えば、漸次表現「じわじわ」「だんだん」「少しずつ」「徐々に」「次第に」の場合、表5を作成し、コーパス文体値を求めると、それぞれ「じわじわ ( $\infty, 1.1$ )」「だんだん ( $\infty, 16.0$ )」「少しずつ ( $15.4, 13.9$ )」「徐々に ( $0.7, 18.9$ )」「次第に ( $0.2, 16.3$ )」となる。次に、これを散布図として図4に示す<sup>5)</sup>。

表5 漸次表現のコーパスデータ

語	白書	知恵袋	$a = \tan \theta$	$b = r/10$
じわじわ	0	11	$\infty$	1.1
だんだん	0	159	$\infty$	16.0
少しずつ	9	139	15.4	13.9
徐々に	155	108	0.7	18.9
次第に	161	25	0.2	16.3



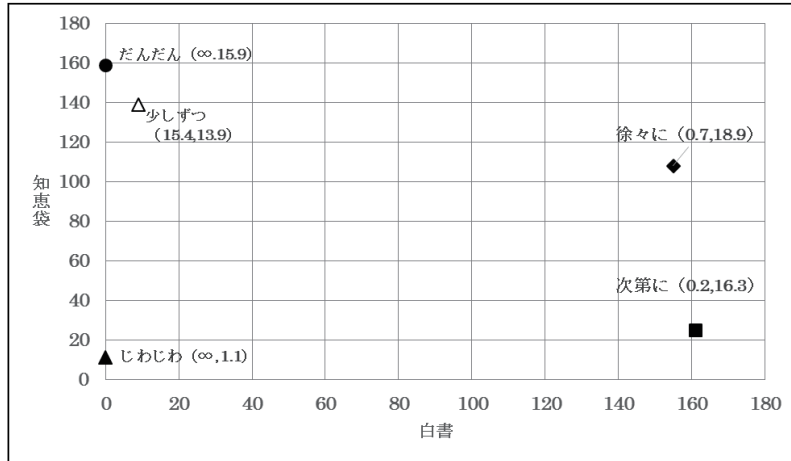
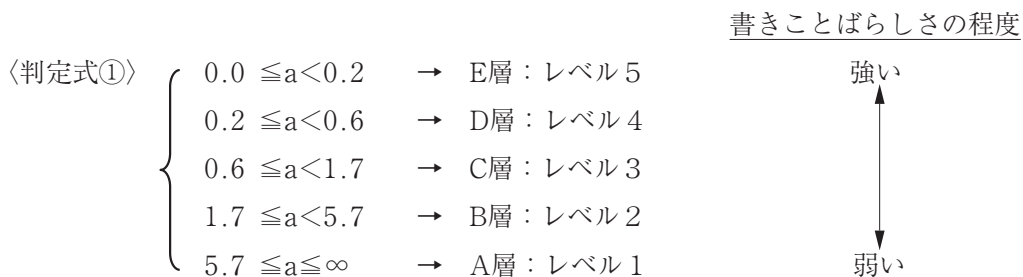


図4 漸次表現のコーパス文体値

図4をみると、コーパス文体値の $a = \tan \theta$ が例えば「だんだん」「じわじわ」「少しずつ」のように大きいと座標はy軸の「知恵袋」に接近する。すなわち、話しことばらしさが強くなり、卑俗体に近くなる。逆に、 $\tan \theta$ の値が例えば「次第に」のように小さくなると当該語の座標は、x軸の「白書」に接近する。すなわち、書きことばらしさが強くなり、文語体に近くなる。なお、bは使用頻度を表し、原点からの距離が「徐々に」のように大きいと使用頻度が高く、逆に「じわじわ」のように小さいと使用頻度は低くなる。また、井上（2010a）では漸次表現の文体の関係を示すため、次のような「文体式」を用いている。文体式では不等号の左側に位置するほど話しことばに近く、右側に位置するほど書きことばに近くなる。中点（・）は同じ分類に属することを表す。

〔文体式1〕 じわじわ・だんだん<少しずつ<徐々に<次第に

そして、前記 $a (= \tan \theta)$ の値を当該語の「コーパス文体値」とみなし、以下、それに基づく文体の判定を暫定的に次のように定めている<sup>6)</sup>。



この判定式①に基づくと、漸次表現の文体式は次のように表すことができる<sup>7)</sup>。

〔文体式2〕 じわじわ・だんだん・少しずつ<徐々に<次第に

なお、判定式①の5段階における境界値の妥当性（最適な境界値の確定）については、今後の課題として残されている。

表6 発生動詞のコーパスデータ

	語	白書	知恵袋	a (文体値)	b (使用頻度)
1	起きる	0	9	$\infty$	0.9
2	起こる	1	9	9.0	0.9
3	生じる	76	5	0.1	7.6

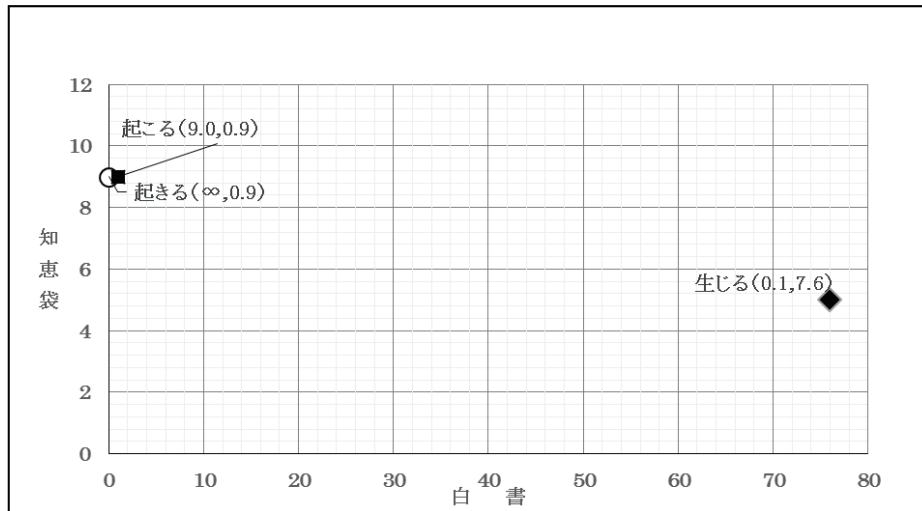


図5 発生動詞のコーパス文体値

それでは、発生動詞の「コーパス文体値」を求めてみよう。

まず、表6に発生動詞のコーパスデータを示す。表6をみると「起きる ( $\infty, 0.9$ )」「起こる (9.0, 0.9)」「生じる (0.1, 7.6)」が導かれている。そこで、前掲の判定式①に基づくと、発生動詞の文体式は次のようになる。また、それぞれの座標を図5に示す。

〔文体式3〕 起きる・起こる<生じる

〔文体式4〕 起きる $\leq$ 起こる<生じる

〔文体式4〕では、「起きる」「起こる」の文体差は「 $\leq$ 」で表示しているが、「起きる」「起こる」と「生じる」の文体差は明確に「<」で表示している。また、「起こる」が歴史的に「起きる」よりも古くから存在し、「起きる」が古語「起く」から生まれたこと、さらに、漢語サ変動詞「生ず」「生ずる」「生じる」という語種、その時間変化を勘案すると、発生動詞4語の文体式は次のように表示することができる。

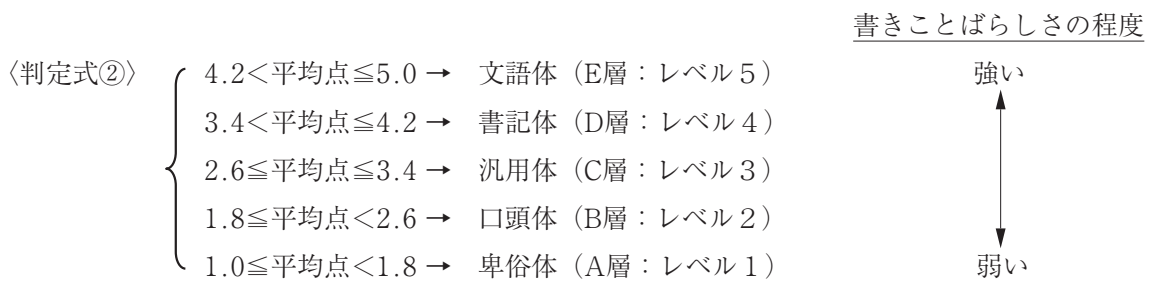
〔文体式5〕 起きる<起こる<生じる<生ずる

#### 4.3 アンケート文体値

井上(2011a)では、「コーパス文体値」とともに「アンケート文体値」に基づく単語の文体をどのように示すかについて検討している。ここでは、アンケート文体値は単語の文体の5分類案(表7)に基づき、私立大学の学生108人を対象に調査語がどの分類に属するかの文体判断を求めたうえで、それぞれの分類に与えた数値(1~5)の平均点について判定式②の基準で文体の判断を行っている。その

表7 「単語の文体」5分類案

1	2	3	4	5
卑俗体	口頭体	汎用体	書記体	文語体
低俗で野卑な感じ、主に私的な場で使用される	くだけた感じ、日常会話などで使用される	特別な感じはなく、公私の別なく使用される	あらたまった感じ、主に公的な場で使用される	高級でかたい感じ、論文・詩歌等で使用される
例) あっし いろいろな	例) あたし いろいろな	例) わたし さまざまな	例) わたくし 多様な	例) 小生 多岐にわたる
話しことば的 ← — — 中間 — — → 書きことば的				



判定式②に基づけば、例えば、大概表現「だいたい」「おおかた」「およそ」「約」の場合、平均点は「だいたい (2.0)」「おおかた (3.4)」「およそ (3.4)」「約 (3.7)」であったため、文体式は次のようになる。

〔文体式6〕 だいたい < おおかた・およそ < 約

一方、大概表現のコーパス文体値によると<sup>8)</sup>、その文体式は〔文体式7〕になり、これはアンケート文体値による〔文体式6〕とほぼ一致する。

〔文体式7〕 だいたい < おおかた ≤ およそ < 約

さて、それでは発生動詞のアンケート文体値を求めてみよう。いま、井上 (2011a) が調査した同じ私立大学で新たに学生91人を対象に行った文体アンケート調査の結果によると、「起きる (2.2)」「起こる (2.2)」「生じる (4.0)」であった。そこで、判定式②により発生動詞3語の文体式を求めてみると、次のように表示される。

〔文体式8〕 起きる・起こる < 生じる

〔文体式8〕によれば、「起きる」と「起こる」の文体差は認められないが、「起きる」「起こる」と「生じる」の間に文体差が認められることは明確である。また、〔文体式8〕はコーパス文体値に基づく〔文体式3〕と一致し、〔文体式4〕とほぼ一致している。

## 4. 4 発生動詞の文体式

ここまで発生動詞「起きる」と「起こる」は、コーパス文体値がともにA層・レベル1であり、また、アンケート文体値が同じB層・レベル2であった。そこで、本節では、「起きる」と「起こる」に文体差はまったく認められないとするのか、認められる部分があればそれを表示するのか、また現代日本語における発生動詞の様式的位相差はどのようであるかについて検討する。

まず、「起きる」「起こる」のコーパスにおける出現率を表8により確認する。表8は、3. 2で示した表2に新たに毎日新聞（2000年「日経テレコン21」）の調査結果を加えたものである。

表8 「問題が」と「起きる」「起こる」「生じる」の共起関係

	コーパス（調査者）	起きる（％）	起こる（％）	生じる（％）
1	新聞記事（前川）	84 (52.8)	12 (7.5)	63 (39.6)
2	毎日新聞2000（井上）	184 (54.0)	56 (16.4)	101 (29.6)
3	国会会議録（前川）	85 (20.7)	143 (34.9)	182 (44.4)
4	国会議事録（井上）	55 (31.6)	77 (44.3)	42 (24.1)
5	白書（井上）	0 (0)	1 (1.3)	76 (98.7)
6	Yahoo! 知恵袋（井上）	9 (39.1)	9 (39.1)	5 (21.7)
7	BCCWJ書籍（前川）	113 (25.7)	114 (25.9)	213 (48.4)

「起きる」「起こる」の相対頻度は、新聞コーパス「1.新聞記事（前川）」「2.毎日新聞2000（井上）」では「起きる」のほうが多いのに対し、国会コーパス「3.国会会議録（前川）」「4.国会議事録（井上）」では「起こる」のほうが多い。国会コーパスは口頭で発した言語の記録であることから、あらたまった話しことばが出現する傾向が強い。このため、文体式「起こる<起きる」を仮定することができる。

次に、新聞コーパスは記者による記事であることから、書きことばが出現する傾向が強い。しかし、記事の中にはカギ括弧書きによる談話・発言などの引用も含まれることから、発話を表すカギ括弧内に出現する発生動詞の頻度を毎日新聞（2000）で調査した。結果を表9に示す。

表9 発話内での「問題が」と「起きる」「起こる」「生じる」の共起関係

毎日新聞2000（井上）	起きる（％）	起こる（％）	生じる（％）
総使用頻度	184 (54.0)	56 (16.4)	101 (29.6)
発話内での使用頻度	52 (28.3)	25 (44.6)	22 (21.8)

この結果からは、発話内での「起きる」「起こる」の使用頻度（百分率）は、「起こる（44.6%）」のほうが「起きる（28.3%）」より高率であることから、「起こる」が「起きる」より話しことば的であると判断される。よって、文体式「起こる<起きる」を仮定することができる。

以上から、発生動詞の文体式「起こる<起きる」を指定することができるだろう。そして、発生動詞の「発生する（コーパス文体値0.8、アンケート文体値4.0）」を加え、「生じる<生ずる」とともに整理すると、発生動詞5語の文体式は、次のように示すことができる。

〔文体式9〕 起こる<起きる<発生する<生じる<生ずる

なお、この〔文体式9〕は文体差を相対的に示すことを主目的としているため、各語の文体差の程度については表示していない。ただし、判定式①、②による結果を参考にするとともに、各語が属する文体を考慮すると次のような文体式を提案することができる<sup>9)</sup>。

〔文体式10〕 起こる・起きる<発生する≦生じる<生ずる

## 5. おわりに

本稿では、前川（2011）によるコーパスにおける発生動詞の相対頻度に着目した分析を契機に、「起きる」「起こる」「生じる」「生ずる」の位相について検討した。その際、社会的位相よりも様式的位相の観点から、単語の時間変化、語種に新たにコーパス文体値、アンケート文体値を加えて分析した。

その結果、発生動詞は時間変化という社会的位相の側面を有することが認められる。しかし、現在では文章のジャンルという様式的位相の側面、つまり文体差が発生動詞を特徴づけていることが明らかとなった。また、発生動詞の文体差を文体式「起こる<起きる<発生する<生じる<生ずる」または「起こる・起きる<発生する≦生じる<生ずる」として示すことができた。ただし、この文体式については、日本語教育、国語教育の現場にそのままの形で反映させるか、あるいはどのような文体式として表示すれば効果的かなどについては別途、検討すべき課題として残されている。

最後に、単語の文体式を導出する手順について示すことはできたが、使用コーパスの妥当性、データの質と量、文体判定基準の適否、表示法の適否などについては、今後、数多くのサンプルで検証を行い、コーパス及びアンケートに基づく文体値及び文体式の信頼性を高めていく必要がある。

## 注

- 1 森田良行（1989:945）『基礎日本語辞典』角川書店。
- 2 または、「起きる（56.3%）」の「起こる（22.5%）」「生じる（21.2%）」に対する相対頻度の高さが現代日本語の一般的傾向である可能性が高いというほうがむしろ適切かと思われる。
- 3 俗語、くだけた日常語、無色透明な日常語、あらたまった日常語、文章語の5分類。
- 4 表3は、井上（2009a・2009b）の用語「語の文体」を「単語の文体」に変更し、井上（2010a）に掲載した表の項目の配列を対比しやすくするため、修正、変更を施して新たに作成した。
- 5 散布図の座標は当該語の出現数を用いて作成している。例）「次第に」の場合、白書161、知恵袋25による座標。また、図中の「次第に（0.2,16.3）」の丸括弧内はコーパス文体値。
- 6 井上（2011a）は、 $\theta = 10^\circ$ 、 $30^\circ$ 、 $60^\circ$ 、 $80^\circ$ を暫定的な境界とし、bの取り扱いについては保留している。
- 7 「じわじわ・だんだん・少しずつ」の配列はコーパス文体値に基づく。
- 8 大概表現のコーパス文体値は、「だいたい（85.5）」「おおかた（1.3）」「およそ（0.8）」「約（0.2）」である。アンケート文体値とコーパス文体値の関係については、井上（2011a）参照。
- 9 判定式①からは「起きる（A層：レベル1）≦起こる（A層：レベル1）<発生する（B層：レベル2）<生じる（E層：レベル5）」となり、判定式②からは「起きる（2.2：口頭体）・起こる（2.2：口頭体）<発生する（4.0：書記体）・生じる（4.0：書記体）」となる。〔文体式10〕は、この結果に文章語「生ずる」を加えて導出している。



## 参考文献

- 井上次夫 (2008) 「論説文に見られる書きことばと話しことばの混用」『全国大学国語教育学会115回博多大会発表要旨集』 pp.95-98
- 井上次夫 (2009a) 「日本語コーパスに基づく『語の文体』の明確化」文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」『平成20年度公開ワークショップ予稿集』 pp.109-118
- 井上次夫 (2009b) 「論説文における語の文体の適切性について」『日本語教育』141号、pp.57-63
- 井上次夫 (2010a) 「BCCWJを用いた『語の文体』の位置づけ」文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」『平成21年度公開ワークショップ予稿集』 pp.91-100
- 井上次夫 (2010b) 「単語の文体意識について－話しことばと書きことばの区別－」全国大学教育学会第118回東京大会研究発表要旨集『国語科教育研究』 pp.129-132
- 井上次夫 (2010c) 「BCCWJを用いた『語の文体』の分類」『ICJLE世界日語教育大会論文集・予稿集』CD論文番号1040
- 井上次夫 (2011a) 「書きことばらしさの判断と測定」文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」『平成22年度公開ワークショップ予稿集』 pp.89-96
- 井上次夫 (2011b) 「発生動詞の文体考－起きる・起こる・生じる・発生する」『ICJLE異文化コミュニケーションのための日本語教育』2巻、pp.198-199
- 井上次夫 (2011c) 「単語の文体判断について－話しことばと書きことば－」『全国大学国語教育学会第121回高知大会発表要旨集』 pp.13-16
- 井上次夫 (2012a) 「類義語辞典の文体記述の検討－日本語コーパスBCCWJに基づく文体値の観点から－」『ICJLE大会発表予稿集』2、p.215
- 井上次夫 (2012b) 「単語の文体判断について (2) 一話しことばと書きことば－」『全国大学国語教育学会第123回富山大会発表要旨集』 pp.267-270
- 井上次夫 (2013a) 「様式的位相による類義語の使い分け－大学生の単語の文体判断調査から－」『沖縄県日本語教育研究会2012年度予稿集』 pp.33-35
- 井上次夫 (2013b) 「日本語教育に有用な単語文体の分類について」サンクトペテルブルク第2回国際会議日本語論集『Японский язык: Перспективы научного исследования (日本語: 科学研究の展望)』 Санкт-Петербург (セントピーターズ・タイムズ社) pp.73-82
- 井上次夫 (2013c) 「単語の文体判断について(3)一話しことばと書きことば－」『全国大学国語教育学会第125回広島大会発表要旨集』 pp.303-306
- 井上次夫 (2014) 「様式的位相の統一的表示法について」『第8回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ8) CONFERENCE HANDBOOK』 pp.162-163
- 田中章夫 (1999) 『日本語の位相と位相差』明治図書
- 前川喜久雄 (2007) 「コーパス日本語学の可能性－大規模均衡コーパスがもたらすもの」『日本語科学』22、pp.13-28、国立国語研究所
- 前川喜久雄 (2011) 「『日本語コーパス』の活動を終えるにあたって」文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」『平成22年度公開ワークショップ予稿集』 pp.1-10
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告43) 秀英出版
- 宮島達夫 (1977) 「単語の文体的特徴」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院、pp.871-903
- 宮島達夫 (2008) 「文章の文体と単語の文体－国研コーパスを利用して－」『近代語研究』14、武蔵野書院、pp.375-386